学校安全コーナー

子どもが安心して学ぶ権利の保障のために

第5回

健康面からみた学校安全

川上一恵
医師（かずえキッズクリニック）

学校における児童・生徒の安全については、学校保健安全法に基本的なことが規定されています。しかし、実際には地域、学校によって背景がことなるため、地域、学校、教職員、保護者、地域住民、学校医そして児童・生徒本人、それぞれの視点から考えるべきでしょう。本稿では、内科学校医の立場から、児童生徒の学校安全を考察します。

学校保健の歴史的背景

終戦後の昭和20年代は、子どもたちは低栄養の状態にあり、学校給食が栄養改善に役立ち、学校医は健診で、子どもたちの栄養状態を評価していました。昭和30年代になると、医療の世界では抗生物質やワクチンの開発が進み、結核やポリオといった重症な感染症が予防や治療可能な疾患になりました。学校でも、寄生虫感染や結核対策に力が注がれるようになり、この時代から手洗い、うがいが推奨されるようになります。

その後昭和40年代に我が国は高度成長期を迎えます。都市に隣接して工場が建設され、人々が都市部に集まってきました。都内はもちろん近郊の埼玉、千葉、神奈川の人口が著しく増加しました。学校が次々に建設され、大規模化したのもこの頃です。第二次産業の発展とともに、環境破壊、公害によって新たな疾患が子ども達を襲いました。喘息です。今と比べて、治療薬の種類が乏しかったので、重症な子ども達は空気がきれいな地方の学校に移ることもありました。

医薬品の進歩、環境改善がなされ、子ども達の疾病構造はさらに変化しました。昭和50年代以後、喘息を含めアレルギーによる疾患が増えるとともに、子ども達の体力、運動能力の低下が問題となり始めました。体力測定から背筋力測定が消えたのは昭和59年度のことでした。

平成にはいると、発達障害や心の問題も学校保健の重要なテーマになりました。ここ数年は、いじめの問題、携帯電話やスマートフォンの利用に伴う対人関係の問題が注目されています。

疾患を抱える子と教育

医療の進歩とともに慢性の疾患を抱えた子ども元気な子どもと同様に就学するようになりましたが、児童・生徒によくみられる疾患について解説し、教育基本法上の「等しく」も追求したいと考えています。心疾患と腎疾患を有す

る子どもの学校生活については、以前から学校側の心配と本人のやりたい気持ち、医療者の治療への影響との葛藤がありました。医療の進歩に伴い、学校生活の制限は軽減される傾向にあります。

（心疾患） 心房中隔欠損、心室中隔欠損といった先天性心疾患、川崎病やリウマチ熱といった後天性心疾患および不整脈が含まれます。多くは入学前に診断されており、学校生活管理指導票を提出してもらうことにより、学校での制限が必要かどうかが決まります。学校生活管理指導票では制限不要とされていても、不安に思う保護者や教職員により運動会やプールといった活動に参加できなくされている子どもがいます。近年、心臓震盪が話題になっています。これは胸部に衝撃が加わったことにより心臓が停止してしまう状態です。最も多くみられるのは野球です。硬いボールが胸部にあたると心室細動を誘発しやすいのです。心臓震盪を起こしたときはＡＥＤで救命します。

（腎疾患） 就学前に診断されている場合には、入学時に学校生活管理指導票を提出してもらい、体育や校外行事（宿泊学習など）への参加が管理されます。学校検尿は毎年1回行われます。異常がみつかる確率は小学生の０・５％、中学生の０・８％です。とくに蛋白尿が認められた場合には、その後慢性化したり、腎機能低下につながる確率が高いので注意を要します。

（けいれん性疾患） けいれんは脳細胞が無秩序に過剰に興奮することによって引き起こされます。熱性けいれんや泣き入りひきつけは乳幼児に多く見られる良性のけいれんで、小学生になる頃には多くの場合治ります。てんかんは一次性（特発性）と二次性（症候性）に分けられます。発作にはいろいろなタイプがあり、抗けいれん薬を長く続ける必要があります。発作のコントロール状況により、プール授業への参加が制限される場合がありますが、てんかんの多くは、適切な薬をきちんと服用していれば、ほぼ普通の生活を送ることができます。睡眠不足、過度の疲労、テレビゲームなどによる強い光刺激、抗ヒスタミン薬やテオフィリン製剤、発熱等はてんかん発作を誘発する可能性があり、要注意です。かつてアニメ番組の途中で赤と青のフラッシュライトのような映像をみた子どもが何人もけいれん発作を起こした事件がありました。規則正しい生活を送る、暗い部屋でテレビを見ないということは、誰にとっても大切な事であることがわかります。

（心の問題） 近年、病気ではありませんが、メディア接触の問題、いじめに代表される心の問題が注目されています。長時間のメディア接触は、夜なかなか眠れない、朝起きられない、学校で眠くイライラする、成績が低下する、金銭トラブルといった問題を引き起こします。また、中学生や高校生では、LineやtwitterといったＳＮＳ（social net service）の利用に伴う、対人関係の悪化、ネットいじめといった問題が起きています。

また、いじめやいじめに伴う自死が新聞やテレビで報道され、小学生の保護者の半数がは我が子がいじめられるかもしれないと不安に思っています。日本の子どもの自尊感情が低いことも関係しているかもしれません。いじめの予防は、今後の課題です。

アレルギー性疾患の増加

心臓、腎臓などの内臓疾患の診断、治療が進歩し、多くの子どもが普通に学校に通えるようになりました。最近は、症状が多岐にわたるアレルギー性疾患を有する子どもが増えていま